

# 出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

2019年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文  
障害者週間のポスター

令和元年11月

富 山 県

## 目次

# 心こころの輪りんを広ひろげる体験たいけん作文ぶん入賞いしょう作品

## 最優秀賞

### 小学生の部

わたしの大ききな弟

高岡市立福岡小学校 三年

平野花音 …………… 1

### 中学生の部

近所の小学五年生の子に教わった

射水市立小杉中学校 三年

池田悠太 …………… 3

### 高校生の部

障害者でも仕事ができる

富山県立南砺福野高等学校 二年

沼田亜優楓 …………… 5

# 優秀賞

## 小学生の部

わたしの大すきな弟

心の輪

高岡市立福岡小学校	四年	清水	7
射水市立大島小学校	六年	本多優月	8
……	……	……	……

## 中学生の部

僕の従姉

みんなが暮らしやすい社会

高岡市立戸出中学校	一年	金山	9
高岡市立戸出中学校	三年	篠原瑠那	11
……	……	……	……

## 高校生の部

「優しさ」は幸せを生む

障害者と関わって学んだこと

富山県立南砺福野高等学校	三年	中島	13
富山県立南砺福野高等学校	三年	森谷真衣	15
……	……	……	……

## 一般の部

精神障害者との関わり方

多鍋浩二	17
……	……

# 障害者週間のポスター入賞作品

## 最優秀賞

### 中学生の部

不自由であっても輝ける社会

射水市立小杉南中学校 三年

肥田慶治朗

19

## 優秀賞

### 小学生の部

音が聞きたい

富山県立高岡聴覚総合支援学校小学部 六年

村藤小珀

20

### 中学生の部

幸せのピース

富山市立和合中学校 二年

山本采奈

みんな笑顔に

射水市立小杉南中学校 三年

山崎梨央

## 参考資料

二〇一九年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領……………21

二〇一九年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況……………24

二〇一九年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿……………25

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

# 「わたしの大すきな弟」

ひらの かのん  
平野花音

わたしの弟は、今年小学校一年生になりました。

わたしの弟は、わたしが一才十か月の時に生まれました。

弟は、けい度の知てきしようがいがあります。ほ育園の時は月二回りよう育へ通っていました。小学生になってからは月二回作ぎようりようほうへ通ってうん動をしたり、字を書くれん習をしています。

弟が年長さんの時に、小学校のクラスを決める知のうテストをびよういんでうけました。けっかは、しえんきゆうへ入った方がいいと言われました。わたしは、それをママから聞いて、

「いっしょに小学校に行けるかな。」

「お友だちは出来るかな。」

と、とてもふあんでした。

四月になり、弟は小学校に入学しました。入学式の前日は小学校の先生が、弟のために入学式のリハーサルをしてく

ださいました。

入学式当日、弟はリハーサルのおかげで大きな声で返事をしたりきびきびと動いていました。わたしは、

「すごい上手だったよ！ かつこよかったよ。」

と、弟をほめました。すると弟は、

「うん！ だってもうお兄ちゃんだもん。」

と、え顔で返してくれました。

弟は、しえんきゆうのあすなる組へ入りました。音楽や体育などみんなと一しよにうけれるじゆぎようは一年二組でうけています。

わたしは、みんなが弟となかよくしてくれるか心配で休み時間のたびにあすなる組まで弟の様子を見に行っていました。そんなわたしを見て、お友だちたちが、

「わたしも行きたい。」

「ぼくも行きたい。」

と、言ってくれたのでみんなで遊びに行きました。わたしは、「みんな、あすなろに弟が入っている事をどんなふうに思うかな。」

と、心配していましたがみんないつもとかわらない様子で弟と遊んでいました。

「どうして弟くんはあすなろにいるの？」

と聞いてくるお友だちもありますが、

「弟は、みんなよりもちよっとだけマイペースだから、あすなろでゆっくりべん強しているんだよ。」

と、つたえています。

今では、弟の持ち前の明るさとにこにこえ顔でお友だちもたくさん出来て弟もうれしそうです。

弟は、出来ない事ばかりではありません。みんなより時間はかかるけど、弟のペースで一つ一つ出来る事をふやしていきます。算数のテストでは百点を何回もとっています。ゲームも家族の中で一番上手でやり方を教えてくれます。

わたしは、家族やお友だちや先生たちなどみんなが弟をしようにい者としてではなく、一人の男の子としてかかわってくれているので、弟にとってもすごくいいかんきょうだと思っています。みんなにはかんしゃの気もちでいっぱいです。

今もこれからもわたしは、明るくて周りの人を楽しませる

事の出来る弟が大好きです。

「わたしの弟に生まれて来てくれてありがとう。これからもこまった時はたすけるね。大好きだよ。」

# 「近所の小学五年生の子に教わった」

射水市立小杉中学校 三年

池田悠太

「おにいちゃん、おはよう。」

毎朝会う度に声をかけてくれるのは、近所に住む小学校五年生の男の子です。朝から元気いっぱい笑顔なあいさつで僕も自然と笑顔になります。男の子はどんどん話しかけてくれます。

「おにいちゃん、なまえは？」

「すきなたべものは？」

「このリュック、なにはいつてるの？」

僕はひとつずつ答えていきます。ゆっくり、笑顔で、聞こえやすい声で答えます。しかし実は、この会話は前の日も、その前の日も、その前の日もしているのです。多分、前日の情報のほとんどが記憶に残ってないのでしょう。男の子はそのような障害をもっているのです。この男の子は僕が初めて会った「障害者」という存在で、僕の考え方を変えてくれたのです。

僕が初めて男の子としゃべったのは、僕が小学六年生のときです。地区が同じなので、ラジオ体操や祭りの時間を伝えようとなりました。僕が話すと男の子は何か言ってきました。

それは本当に何かであって、文としては全然理解できませんでした。僕はそのとき、「障害者は大変だなあ」としか思いませんでした。その後も何度かしゃべったけど、どうすればいいのか分かりませんでした。

そんなある日、地域共生社会についてという講演会に参加しました。その理由は、障害をもつ人との関わり方を学びたかったからです。この講演会で特に印象に残ったのは「聴く」ということです。「聴」という漢字には、耳・目・心という言葉が使われています。また、人は口が一つで耳は二つあります。つまり、自分が話す倍だけ他人の話を、目と耳と心を使って聴かなければいけないのだそうです。これを聞いて振り返ってみると、僕は男の子の話の単語を「聞こう」と思っています。

した。しかし本当は、何を伝えたいのか、どんな気持ちなのかを「聴こう」とする必要があるんだと学びました。実践してみると、少しづつ何が言いたいのか分かるようになって、うれしかったことを覚えていきます。

今では毎朝男の子と話すことが楽しいです。でも、たまにこの光景を見た僕の友達がこう言います。「お前、大変なことしとるなあ。」僕はその友達にこんな言葉を返します。

「別に特別なことはしてないよ。障害があるうがなかるうが、僕がしていることは同じ。人とのコミュニケーション、つまりしつかり話を聴いてるだけだよ。」

僕は「障害者」と書くより「障がい者」と書く方がいいと思います。公害や災害などと同じ「害」という字が使われてないからです。障がい者は健全者にとって邪魔な存在では決してありません。障がい者だからこそ健全者に勝る部分はたくさんあります。特に、人や物を大切にする優しい心や協調する心は、僕たちが見習わなければいけないと五年生の子どもから学びました。健全者と障がい者、お互いがお互いを認め、助け合える社会を目指したいです。

# 「障害者でも仕事ができる」

富山県立南砺福野高等学校 二年

沼田 亜優楓  
ぬま だ あゆか

私の母は、高齢者の介護の施設で働いています。ある日、支援学校から知的障害を持っている女性のHさんが就業体験をしに来たそうです。そのときの母から見た印象はとても元気で、笑顔が絶えず、挨拶も大きな声で良くできていて、とにかく明るい人だなと思ったそうです。このときは洗濯をする仕事を体験しに来ていたけれど、その後また来られて、次は介護の仕事の体験をしたそうです。すると、Hさん本人が高齢者と関わるのが楽しかったようで、「私は絶対ここで働きたい」と言ったそうです。しかし、障害を持っている人は今までその施設で雇ったことがなく、母は障害者が福祉の道で仕事をするのできるのだろうか、障害者なのに高齢者をお世話することができののだろうかと考え、不安でHさんを受け入れるか家でもずっと迷っているのを見ました。しかし、本人が働きたいという強い気持ちを持っていたため、受け入れることにしていました。

私は母からHさんの話を聞いて、どのような人なのか気になり、施設で夏休み中に納涼祭があったためボランティアを申し行くと共にHさんの仕事をしている様子を見に行ってみました。まず、施設に着き初めてHさんと私が会ったときに私より先に大きな声で挨拶をしてくれました。初対面にも関わらず凄く近い距離で私の顔を眺められ、最初は何をされるのだろうか少し戸惑ったけれど、「ボランティアで来ました。今日一日よろしくお願ひします」と言ってみると、また大きな声で「よろしくお願ひします」と笑顔で返ってきて、私もハキハキ話していて母の言っていた通りとても元気で明るい人なんだなと感じました。初対面の人など、どんな人にも恥ずかしさがなく、平等に元気を振る舞える点には、介護の現場では大切なため、尊敬しました。目が合ったときにはニコツと笑顔で「緊張しなくてもいいよ。ここに座って皆さんとお話する？」や、「何か困ったことがあったら言って

ね」と言われ、気がきいて、優しい人だなと思いました。また、母はバイタルチェックを教えたそうで、私が施設に行ったときには一人で利用者の方とコミュニケーションを取りながら測定をされていて、知的障害を持っている人だと忘れるときが何度かありました。もちろん、いつ何があるか分からないため、送迎時や入浴時は他の職員と共に行動していました。Hさんは人懐っこさもあり、たまに戸惑うこともあったけれど、とても愛嬌があり常にニコニコしていて周りの人を和ませる癒しの存在でもあったと気づきました。

他の職員も交えた昼休憩中に将来の話になりました。他の職員の方に「将来何になりたいの?」と言われ、「介護福祉士です」と答えている会話がありました。すると、納涼祭も終わり、帰り際にその話を覚えてくれていて「私、応援しとるよ、亜優楓ちゃんなら大丈夫。いつか一緒に働けたらいいね」と肩に触れられながら言われ、国家試験に向けて勉強や実習をより一層頑張ろうと思いました。

Hさんの仕事をしている姿を目にして、障害を持っていても人と関わる仕事をする事ができるのだと母と共に知らされました。何よりも利用者の方と話しているときのHさんも利用者の方もお互いが楽しそうでいいなと思いました。

障害を持つ人と働くとは、周囲の人の理解を得た上で、で

きることはもちろん、難しそうなことには覚えられるように日々訓練していく必要があると思いました。また、障害を個性として見てみると、その人ならではの良い部分が見えてきて捉え方を変えることが必要だと思いました。

最近では、障害のある人の職業の安定を実現する具体的な方策を定めた障害者雇用促進法があり、障害者が普通の人と同じように働く割合が増えていると思います。これからも障害の有無に関わらず皆が平等に働ける、暮らせる時代になっていくといいです。

# 「わたしの大すきな弟」

高岡市立福岡小学校 四年

清水 愛結花

わたしの弟は自へいしようというしや害をもっています。まわりの人からは、

「しやべれなくてかわいいそうだね。」

「なんで同じことができないの。」と言われたりするけどわたしは弟のことをかわいそうだとは思いません。理由は、弟はしや害をもっているけど自へいしようは病氣じやないし私と同じ人間だからです。でも少したいへんなこともあります。そんなときは家族で助け合って弟がこまらないようにするにはどうすればいいか話し合います。そうするとかいけつできます。それにわたしも弟がどんな子でも大事な弟です。それに弟は、しや害があるからこそわたしよりもっと上手にできることがあります。それは絵やねん土です。弟は絵がとても上手です。ねん土ではこまかい部分までしっかりと作れます。わたしはそれを見てすごいなあと思います。弟みたいに少しちがうところがある子をかからかう子がいたらまち

がつていることを教えてあげようと思っています。それをもつとまわりにひろめて弟のような子たちがすごしやすくなつていけばいいと思います。

## 「心の輪」

射水市立大島小学校 六年

ほんだ ゆづき  
本多優月

わたしは、このあいだ病院にお母さんと行きました。イスにすわって薬をもらうのを、待っていると、同じ手話サークルに通っているちよう覺しよう害者の女性を見かけました。

お母さんに、

「あいさつしてこられ」

と言われました。でもわたしは、はずかしくて、手話をましがえたらどうしようという気持ちでいっぱいであいさつが出来ないまま、薬をもらい家に帰ってきました。帰ってきた後、せつかく手話サークルに通っているのに、手話をしていなくて、あいさつをしておけば良かったなと思いました。

前にも、パン屋さんで、帰ろうとしたときに、ちよう覺しよう害者の男性に会いました。でもそのときも、あいさつがはずかしくて出来なかったのでもしておけば良かったなと思うことがありました。

わたしは、まちがった手話をしたらどうしようと思いきわ

れたらはずかしいという気持ちが大きくて、話しかける勇氣がありませんでした。

わたしは、学校の地いきのふれ合い活動で手話にふれて、楽しいと感じたのでおばあちゃんが、通っていた手話サークルに入りました。

わたしにとって手話は、ちよう覺しよう害者との言葉で、わたしが手話サークル内で見た中では、みんな笑顔で手話をしているので、手話は笑顔になれる大切な言葉だと思っています。

はずかしいという気持ちをすてて、一歩ふみ出して自分からあいさつをしてみたら、気持ちが良いし、次につながる自信が出来ると思いました。

わたしが思ったように、みんながはずかしさをなくして、自分から一歩ふみ出してみたら、いろいろな人と仲良くなれて良いなと思います。

## 「僕の従姉」

高岡市立戸出中学校 一年

かな やま こう や  
金山公哉

僕には一つ上の従姉がいる。彼女は「筋ジストロフィー」という病気だ。そのため、知的障害と筋力の低下がある。だから移動するときも、ハイハイか車いすでしか移動出来ない。

一人で、ご飯を食べることも出来ないし、トイレに行くことも出来ない。何かを要求するときには、「あー、あー。」と言うことしか出来ない。

僕が初めて「この人、自分と違う。」と思ったのは、三才のときだ。その時、正直僕は彼女が嫌いだった。全然自分と、話してくれなかったからだ。

僕は彼女に、年に三回しか会わない。その一年、一年の間に彼女はどんどん大きくなっていった。彼女が生まれたときの体重を母に聞くと、七百グラムだと説明されとても驚いた。僕はそのとき、彼女が嫌いという気持ちが無くなった。

僕は、気軽に友達と遊んだり、学校に行き、勉強をしている。それが普通だが、彼女は、そんな僕の普通をすることが

出来ない。彼女は自分の出来ること、自分にとって普通のこととを、一生懸命がんばっている。そんな彼女は素晴らしいと思

った。  
親せきが皆で集まり、食事会をするときも、彼女だけはおかゆを食べている。食べ物が変わっても、親せきの中心にいる。必ず、誰かが声をかけたり、「おすわり出来たね。」「沢山食べられたね。」など、彼女が出来たことを認めている。僕は今まで、変な目で見ていたが、彼女に対する関わり方を変えなければいけないと感じた。

また、僕が感心することの一つに「親の優しさ」というものがある。自分が親になったと仮定して考えるとき、彼女の親のように、優しく、愛することが出来るだろうか。彼女がテレビのリモコンを放してくれなくて、おじに言ったとき、おじは、「ごめんね、もう少し待ってから、もう一度言ってみて。」と言った。そのとき自分も、障害者に差別をしないよう

にしよう、と思ったのだ。

健常者と障害者は、障害があるか無いかだけの差で、同じ人間だ。このことを彼女が教えてくれたのだ。健常者と障害者の差別をなくすためには、まずは障害者を理解することが非常に大切だと思う。理解するためには、相手を知ることが大事だ。話をしたり、一緒に遊んだりして、時間を共に過ごす。そうすれば、自分との共通点を見付けることもでき、相手を知ることにつながるだろう。

僕は、これから社会に出ていくうえで、いろいろな人に出会うと思う。もちろん障害をもつ人にも出会うだろう。そんなときに、差別せずに、相手を理解するようにしたい。困ったときに助けてもらえたら、僕はうれしい。障害のある無しに関わらず、うれしいものではないかと思う。互いに尊重し合い、助け合って生きていけたらいいなと思う。

高岡市立戸出中学校 三年

# 「みんなが暮らしやすい社会」

篠原 瑠那

私の曾祖母の妹は、視力が全くないので物を見ることができません。私たち家族は彼女と一緒に暮らしています。私は彼女を「おばちゃん」と呼んでいます。

おばちゃんは、目が見えなくても家の中を一人で行動し、ご飯を作ること以外の日常生活は自分でしています。それでも、手の届かないところの物を取るときなど私たちの援助が必要なのもあります。

おばちゃんは九十歳を超える高齢で、耳も聞こえにくくなっています。そのため周りの状況をうまくつかめないこともあります。先日、私が急いでいる時に頼みごとをしてきたので、つい怒鳴ってしまいました。おばちゃんの悲しそうな顔を見たときの苦しさは今でもはっきりと覚えています。

おばちゃんと暮らしていてイライラしてしまうことや辛くなることがあります。それでも、目が見えず、その上耳も聞こえにくくなっているおばちゃんと一緒に暮らしていくため

には、いろいろな状況と向き合っていかなければならないと思っています。きちんと互いに向き合うことができれば、嬉しいことや楽しいことも一緒に味わえるからです。私は、家族というとても身近なところに障害をもつ「おばちゃん」がいてくれたおかげで、いろいろなことを考えることができました。

その中でも私にとって一番大きなことが、相手の障害に向き合い、互いに学び合おうとすることの大切さです。障害をもつ人に対して差別的な意識をもったり「かわいそう」だと決めつける見方をしたりするのは間違っていると思うのです。障害があるために経験した苦労がたくさんあるだろうと思います。しかし、だからこそ得たものもあるのではないのでしょうか。おばちゃんを見てそう思います。

目が見えないことに甘えず、自分のことを自分でしようとするおばちゃんはとても頑張り屋です。そして、いきなり怒

鳴ってしまった私のことをわかってくれる優しい人でもありません。おばちゃんから、人としての強さや優しさを教えてもらいながら毎日を過ごしている気がします。また、私にとつて「普通」に生きていけることが、実はとても恵まれていることなのだと思わせてもらいました。毎日を感謝して生きていきたいと思えるようになったのも、おばちゃんのおかげです。

障害をもった方と私たち健常者が一緒に楽しく生きていける社会を、これからつくっていかねばならないと思います。そのためにはまず、障害と向き合い、お互いに心を開き、それぞれが自分にできることを精一杯することが大切だと思います。

頼ること、自分ですること。見守ること、手を差し出して支えること。そして相手から学ぶこと。私たち一人一人の、相手を尊重し信頼する気持ち、誰もが暮らしやすい社会を実現する第一歩だと思います。

# 「「優しさ」は幸せを生む」

富山県立南砺福野高等学校 三年

なかしまなな  
中島菜々

近年、ニュースでは福祉施設での事件を多く耳にすることがあった。そこから過去の事件を調べてみるとある記事に目が止まった。それは、ある知的障害者福祉施設で十九人が刺殺され、二十六名が重軽傷を負う事件だ。これだけでも衝撃的な事件だが、私は犯人の言葉に驚いた。

「障害者なんていなくなってしまえ。」

事件の起こった施設には、重度の知的障害者が入所していた。犯人は犯行の理由を「障害を持ったまま生きていくのはかわいそうだと思うから」だと語っている。人を殺している理由はない、たとえそれが障害者だからといって許されるわけがない。だから、犯人は「優しさ」だと主張しているが、その「優しさ」の使い方は間違っていたと思う。

しかし、この事件を知っていくにあたって私は犯人だけが悪いのではないという気持ちも少しあった。もちろん犯人が悪い。殺人を犯した原因を知るためには、犯人の性格や生活

歴などを調べる必要があるだろう。しかし、彼をそうさせた生活環境や社会のあり方も考えなければならぬと思う。

犯人は三年ほどこの施設で働いていた。意思疎通が難しい人がいた、夜に徘徊してしまう人もいたそうだ。暴言や暴力を受けたりすることもあり、職員には相当な負担がかかって大変だったのかもしれない。この施設では夜間になると入所者二十人を職員一人で介助していたそうだ。そんな過酷な状況が、犯人の心を追い込み、危険な考えが大きくなっていったのではないか。

人は弱い心を持ち、人と比べ自分より弱い人間を見つけて自分を優位に置きたがる。そして自分が相手より優位にいると安心するのだ。時には人をからかい、自分ではなく周りに刺さっていくことがある。そんなちよつとしたおふざけは日常生活にあふれている。最初は小さなからかいでも、一人の命を奪ってしまうくらい大きくなってしまふ。命を簡単に奪

ってしまふ「いじめ」はなくなつてほしいと思う。

今回の殺人事件といじめに共通するものは、社会と環境にあると思う。私は一人の人間として、このような事件を二度と起こさないように、安全で楽しく過ごせる社会づくりに貢献していきたいと思う。そのために大切なことは「優しさ」だと思う。優しくされると誰だって嬉しい。嬉しいと誰かに優しくしたくなる。とても心があたたまると私は感じる。

相手のことを考えながら、相手の嫌がることをしない「優しさ」、間違つたことをしている人に「それは間違いだ。」と伝えることができる「優しさ」、悩んでいたたり、ストレスを抱えていたりする人に寄り添える「優しさ」、まずは身近なことから「優しさ」を心がける人が増えれば、社会はどんどん優しくなると思う。

そして、社会の制度や職場も優しくなるべきだ。今は少子高齢化が進み、人手が足りず負担がかかることもあるだろう。しかし、その困難も「優しさ」で助け合うことで乗り越えていく必要があると思う。相手のことを考える「優しさ」や間違いを指摘する「優しさ」、仕事がうまくいかず悩んでいる人がいれば、寄り添い、話を聞き励ますこともできる。

もちろん、障害者の方が相手でも同じことがいえる。どんなことで困っているか、どんなことで喜ぶのかを考えられる

「優しさ」で多くの人の理解を深めることができるだろう。

すべての人が障害の有無に関わらず幸せに生きられる社会の実現には、時間がかかるかもしれない。しかし社会や環境は人間がつくつていくものである。一人ひとりの心の中に「優しさ」があれば今よりずっといいものに変えることができるだろう。

富山県立南砺福野高等学校 三年

# 「障害者と関わって学んだ」と

もり や ま い  
森 谷 真 衣

私は福祉科へ入学して、今まで高齢者や障がい者の方々と実習を通して関わり触れ合ってきた。初めての实習は、会話が續かなかつたり介護技術が上手くできなかったりして辛い、早く実習が終わってほしいと感じていた。けれど、さまざまな実習先へ行き体験し少しずつ人との関わり方に対して気持ちに変化した。特に障がい者に対しての印象が私の中で大きく変わった。

私は高校に入学する前から障がい者との関わりがある。私の叔母である。叔母は私が小さい頃からよく話をし、私も普通の人として関わってきたはずだった。しかし、私が大きくなるにつれて叔母の様子も変わった。急に暴れだしたり、昔に比べて話す機会も減った。その頃から叔母は普通の人ではないと気づき知的障害者だと知った。叔母の様子から障がい者とは、何を考えているか分からないから不気味、急に暴れるから怖いという印象を強く感じた。日に日に私は叔母と深

く関わらないでいった。けれど私はおじいちゃんやおばあちゃんと言話をすることは好きであり、人の役に立ちたいという夢があったため福祉科に入った。実習が慣れはじめ少しコミニケーション力が身についてきたと感じてきた頃に障害者支援施設で実習をさせていただいた。実習前日から私は緊張していた。またどのように関わればよいか想像がつかず、不安だった。そして実習初日、ホールに入つてすぐに障がい者に話しかけられた。そのとき、その方の話の内容が分からなかった。また他の実習先では利用者の方同士のケンカがなかったため、今回の実習でケンカを見たとき困ってしまった。改めて障がい者の方と関わることは苦手と感じた。初日から、なかなか自分から話すことができずにいた。すると職員の方から「利用者の方には個性があり、その個性を理解し支援を行うことが大切だ。」と教わった。そこで私は一人ひとりの個性について知ることを目標にし、関わっていきこうと決意した。

二日目、私は積極的に利用者の方とコミュニケーションを行い、その方に合った方法で会話を続けることができた。また支援を行っている際にこの施設では、利用者本位の支援であることを理解した。その支援の中で利用者の方を説得するのではなく、思いを理解し受け止めることが私たちのやるべきことであると気づいた。そのとき、私は障がい者の方を特別な目で見ていたのではないかと考えた。実際に叔母が障がい者であることを知ってから、自分が叔母に対しての接し方が変わってしまったため特別な目で見ていただろう。けれど、今回の実習で障がい者の方との関わりを学び障がい者に対しての考え方が変わってきた。最終日には利用者の話を傾聴しながらコミュニケーションを行った。できること、できないことを把握してサポートする。これらを意識し行動すること、私は今回の目標を達成することができたと思う。この三日間の実習の中で、自分自身の不安や苦手等の気持ちが少しずつ消えたことが分かる。障害があってもなくても、人には感情が必ずあることを学んだ。その思いを言葉にして伝えることができないう障がい者の方や、何かの原因でケンカをしてしまった利用者の方々。その方々の思いをしつかり聞き、受け止めること。特別な目ではなく一人の人として見る事が大切だということ。それらは今後の実習につながってくるだ

ろう。

最後に、叔母について相談してみた。叔母の人生を変える第一歩は、新しい人や分かり合える人を見つける。そのためには周りの人たちのサポートも必要であることを話して下さった。そして叔母の話相手になることが私の役目と気づいた。自分たちの役目を理解し一緒に過ごすことで今後、叔母が落ち着いて安心できる生活を送ることができると考えた。この考えは障がい者だけでなく、高齢者の方も同じだと感じる。一人ひとりに合った介助方法を学び、積極的に関わることで相手の思いを知り、信頼関係を築くことができる。これからは、利用者の方に対して何をしてあげるとその方の望んだ生活を過ごすことができるのか、観察し関わりながら、人の役に立ちたいという夢を目指して学校生活を送っていこうと思う。

## 「精神障害者との関わり方」

多<sup>た</sup>  
鍋<sup>なべ</sup>  
浩<sup>こう</sup>  
二<sup>じ</sup>

私がこの病気になってからというもの、色々な人の世話になってきたし、色々な人と知り合いになり付き合ってきた。それは、看護師であったり、デイケアのスタッフだったり、作業所の職員であったり、途中駅の社員だったりした。精神障害者社会復帰施設の職員だったりもした。看護師とは病院に入院している時から通院している時、世話になった。お互いが上昇傾向であった。また介護士の世話にもなったりしたが、手伝ってきたりもした。それは入院生活から退院を間近にして、看護師の補助をしたり、介護士を手伝い、下膳、配膳、テーブル拭き、他患者の食事介助等院の職員の代わりとなるようなことなどもしてきた。とにかく病気もよくなって、環境に慣れるとそこで活躍の場を求める私だった。病気もよくなれば家に帰り働きに出たいと思うのが普通です。退院をしたががそれを受け止める体制がなくていい、それが問題です。家族会等をするようにしてくださいさなければ話が前へす

すみません。ある本で高EE家族での患者の再発率、と低EE家族での再発率について述べられていました。兄が亡くなり母一人ではめんどう見きれず、私は家へ帰ることが困難いや家へ帰ることができなくなりそうので外泊もままならぬ状態が続くようです。

デイケアに通い始めて半年経ちますがまだ慣れておらず戸惑うことが多いのですが、職員の言うことに従わなかったり、病気が出て行動停止になることもあるのですが、とにかくよく寝て、心を整えて活動したいと思っています。兎に角しっかりと職員の迷惑の掛らない様に自立したいです。デイケアのスタッフは私がパソコンやカラオケだと元気になるのを見ているのならそれを伸ばすように心掛けて欲しいと思います。

通う時に世話になる駅員は私達障害者が電車に乗ると他のお客に迷惑になるかと思っているのを感じます。

作業所では、職員の目がさらにきつくなる。怠けていると工賃が減る。一応商品だからちゃんとした作業内容でないと売り物にならない、つまりお金としての収入が減る。つまり工賃にならない。工賃にならないということは職員の収入にならない。作業所の作業というのは単純労働が主である。やっていると嫌気もさすというものである。そんな時は檄が飛ぶ。また仕事が終わってから便所掃除をしたり、畑仕事をしたり色々大変である。だが頑張ってやっている。

概して健康な人々は我々が鈍病になっていると思っている。我々病気持ちが行動停止になったり、感情が気持ち良くなかったり妄想にふけるようになったり、怒り出したりすることがある。けどそれは一過性なものである。すぐに治るものであるが、健康な人々はそれを「よし」としない。ちよっとしたことを理由に責められる。我々の病気に対する対応の仕方を知らないでいる。やはりここでも家族会のような学習会が必要なんだと自分では思う訳である。でも家族会自身が最近なくなってきたのである。そこを注意しないと前には絶対進めない、お互いに。やはり何らかの学習会が絶対必要である。兎に角お互いに勉強しなければならぬと思う。再発しにくい環境で暮らすのと再発しやすい環境で暮らすのは違ふと思う。本にも高EE家族で暮らすのと低EE家族で暮らす

のとは再発率が全然違ふと書かれている。

家族と暮らすのが一番いいと思うのはどんな病気の時だつてそうだと思う。病院なり、福祉施設から家族の住む家へ帰るのはこの病気の最終目標である。家族とうまくやって行けるか、一人で暮らしていけるか考えるのが一番大切だと思う。

それを賛成してくれるのが先生（医者）だったり、看護師だったり福祉の人だったり家族自身だったりするわけである。社会に出て働けるようになるまで一緒に頑張つて行こうじゃありませんか。働けるようになれば金目の物も買えるし、おいしいジュース類も飲めるようになるのではないかと思う次第です。私はWORK INや求人情報を見ていて今どんな職種があるか調べている次第です。

# 障害者週間のポスター

【中学生の部】

○最優秀賞



「不自由であっても輝ける社会」

射水市立小杉南中学校 三年

こえ      だ      けいじろう  
肥   田   慶治朗

# ○優秀賞

【小学生の部】



「音が聞きたい」

富山県立高岡聴覚総合支援学校小学部 六年

むら とう こ はく  
村 藤 小 珀

【中学生の部】



「みんな笑顔に」

射水市立小杉南中学校 三年

やま ざき り お  
山 崎 梨 央



「幸せのピース」

富山市立和合中学校 二年

やま もと さ な  
山 本 采 奈

## 二〇一九年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

### 1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

### 2. 主催

内閣府、富山県

### 3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

### 4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

### 5. 募集テーマ

- (1) 心の輪を広げる体験作文  
出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう——
- (2) 障害者週間のポスター  
障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

### 6. 応募資格

- (1) 心の輪を広げる体験作文  
小学生、中学生、高校生及び一般（特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）
- (2) 障害者週間のポスター  
小学生及び中学生（特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

### 7. 募集の方法

- (1) 心の輪を広げる体験作文  
① 作文の題名（タイトル）及び内容

作文の題名(タイトル)は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。募集の区分は、小学生、中学生、高校生及び一般の四区分とする。

なお、応募作品は未発表のもの一編に限る。

② 制限字数等

一編あたりの制限字数は、小学生及び中学生については四〇〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生及び一般については四〇〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

なお、用紙は、原則として四〇〇〇字詰め原稿用紙(B4判縦書き)を用いること。

③ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、性別、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

④ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六・四四四・〇二二三

⑤ 募集期間

令和元年七月一日(月)から九月二日(月)までとする(当日消印有効)。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名(タイトル)及び内容

作品の題名(タイトル)は自由とし、内容は、「障害者週間」を広く周知し、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人との相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

募集の区分は、小学生及び中学生の二区分とする。

なお、応募作品は未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語その他の文字は入れないものとする。

② 規格、画材等

規格は、画用紙B3判(横三六四mm×縦五一五mm)又はいわゆる四つ切り(横三八二mm×縦五四二mm)を使用し、これに満たない作品は、B3判又は四つ切りの大きさの台紙に貼付する。彩色、画材は自由とする。なお、作品は縦位置(縦長)のみとする。

③ 応募者の属性等に関する資料(属性表)

作者の属性表(指定様式)の項目に従い、氏名、住所、年齢(生年月日)、性別、所属先(学校名・学年又は職業)、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名(タイトル)及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

④ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五十二 Ⅱ〇七六―四四四―〇二二三

⑤ 募集期間

令和元年七月一日（月）から九月二日（月）までとする（当日消印有効）。

8. 選定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を9月末までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。

9. 表彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（二万円相当、五千円相当）を贈る。また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

作品は原則として返却しない。ただし作品の返却を希望するときは、応募時に申し出ること。

2019年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計	男 性	女 性
小 学 生	6 編	1 編	5 編
中 学 生	50 編	14 編	36 編
高 校 生	85 編	4 編	81 編
一 般	1 編	1 編	0 編
合 計	142 編	20 編	122 編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計	男 性	女 性
小 学 生	1 点	0 点	1 点
中 学 生	22 点	8 点	14 点
合 計	23 点	8 点	15 点

## 二〇一九年度

### 「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生	元水橋郷土史料館長
島崎 俊哉	富山県具有美術品管理事務員
水井 勤	富山県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉・ボランティア振興課長
布尾 英二	富山県身体障害者団体協議会会長
平野 幹夫	富山県手をつなぐ育成会常務理事
青山 正二	富山県精神保健福祉家族連合会理事長
霜 鳥 裕一郎	富山県厚生部健康課副主幹・精神保健福祉係長
澤 橋 貴子	富山県教育委員会県立学校課特別支援教育班指導主事
大村 政人	富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・  
障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和元年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター